



鎮守の森だより

NPO法人社叢学会ニュース

第132号

2025年1月10日

年頭所感

NPO法人社叢学会理事長・皇學館大学名誉教授
櫻井 治男

会員各位には静寧にて御超歳のこととお慶びを申し上げます。昨年の元旦は、能登半島地震の発生で心を痛めるスタートとなりました。さらに、生活復旧・復興が進まない最中に襲った9月の豪雨が厳しい被害の追負担となっていることに、お見舞いの気持ちしか寄せることできないもどかしさを感じるばかりです。

石川県や富山県の神社被害や社叢の状況については、神社庁のホームページなどネット上に写真と共に逐次報告されその一端を窺うところですが、正月の震災による本殿・拝殿など建物の倒壊、石製の社号標や鳥居・狛犬の損壊などの片付けが進まないなかで、9月の大雨によりかろうじて存していた本殿が、山崩れで押しつぶされるなど回復の見込みが立ちにくい事態が発生しているとも聞き及んでいます。能登半島のとある神職さんによれば、表面上は見えない亀裂の入っている箇所へ豪雨が襲い、雑木林の里山を転換し植栽された杉山が一気に崩落したところもあり、土地特有の茶褐色の泥土が里へ流出し悩まされてきたとの思いを語られました。

こうした話題に接する一方で、昨年11月に三重県志摩市で開催された「全国海女サミット2024」にいられた輪島の海女さんたちのお話しをお聞きして、自然の厳しさに非力な人間の仕事を自覚した次第です。お話しに依れば、地震により目の前の港の海水が無くなり、それが津波の前兆だと思ったがそうではなく、今まで聞いたこともない「海底隆起」という現象であったとのこと。これまでの場所では潜れず、隆起した先の磯場での操業を本格化する矢先の豪雨被害は、泥が漁場へ流れ込

んで膝あたりまで堆積し、サザエ・アワビをはじめ海藻類が壊滅し、その回復は冬の大しけで海が底から混ぜ返されるのを待つしかないだろうという発言は、深く重い憂慮の声と聞こえました。山から里の社叢、そして海へと連続している被災の様子は、個々の場面を回復するだけでは済まされないという視点が必要なことを教えてくれています。

ところで、本年は伊勢の神宮で20年に一度斎行される重儀、式年遷宮の準備が始まる「遷宮元年」に当たります。遷宮の諸祭・行事は凡そ33に及ぶとされますが、その内、社殿造営にかかる、御料材伐採のために杣山へ入るにあたり、山口の神に入山の許しと作業の安全を祈る「山口祭」が5月に予定されています。この祭儀は、用材がかつては神宮宮域より得られていた由縁で、内宮・外宮の祭場でそれぞれ行われます。現在は用材(檜)の多くは長野・岐阜両県の木曾・裏木曾から調達されています。やがては宮域林でまかなえるように植樹・育成・管理が続けられてきていますが、それは500年周期という長期間で循環させる檜の人工林育成という取組みの中でのことのようにです。私たちもこの機会に長期のスパンで動く神宮の森の原点を振り返り、自然との共在のありどころを考えて行ければと思います。

本年は、6月に年次大会を太宰府天満宮のご厚意で福岡県で開催します。また、関東・中部・関西・九州地区での例会、社叢インストラクター・見守り隊の養成事業、学会誌・会報発刊などの事業について会員各位には積極的に参画・協力下さるようお願い致します。

年次総会 概要決まる！

6月21日(土)・22日(日)に太宰府天満宮(太宰府市)にて
特別講演は「太宰府天満宮仮殿と社叢(仮題)」
シンポジウムテーマは「英彦山の山岳信仰と社叢」
見学会は英彦山神宮、竈門神社へ

<研究発表を希望する方は、2月中旬に事務局まで連絡をお願いします。>



「人の生活と未来に託す鎮守の杜」

話題提供：濱野 周泰氏（生物環境調節学博士）
東京農業大学地域環境科学部・社叢学会副理事長

今回は長年造園樹木を対象に造園樹木の分類や樹体構築、生態環境に応じた適正植栽域などの解明につながる研究指導を行ってこられた濱野周泰氏に鎮守の杜と人との関係、そして未来についてお話しいただいた。

●SUGs(持続的利用目標) 鎮守の杜は樹木を中心とした生態系である。生物は環境の中でしか生きられないという宿命を持っており、環境から逃れることができない。環境は直接見るができないので、何かを通して意識するということになる。その観点において神社の社叢はわかりやすいのかもしれない。清々しいなど感じるの感性が豊かであるということもあるのだが、環境が悪化し、大気汚染により健康被害が出るというようなことの方が環境の変化を実感しやすい。植物は自ら動くことは出来ず、環境により変化していく。木が枯れるとは環境の悪化が顕在化していること。人にとって快適な空間は、必ずしも樹木にとって良い環境とは言えない。人の都合で移動させられた樹々が環境に馴染めなければ生きていくことは出来ない。SDGsと言われる今日ではあるが、果たして今の世界は持続可能なものなのだろうか。限りある資源を有効活用するためのSUGs(持続的利用目標)を考えるべきではないかと思っている。環境に適さない植物を植えることは必ずしもSDGsとは言えない。杜の中で生きるものは人に必要な植物だけではない。無機的環境が生物に働きかけ、生物が無機的環境に働きかける。生物同士もお互いに働きかけている。例えば鎮守の杜の体裁をよくするための植樹や落ち葉の整理や、消毒や殺虫剤など

を使用することで生態系を崩すことはSDGsとは言えないのではないだろうか。造園はSDGsの延長線にあるだろうか。生態系の循環に人がどのように関わるか(べきか)を考えなくてはいけない。

●杜は生き物のコミュニティの場 健全な森は多くの生き物を育む。例えば森にある1本の樹木に「オオムラサキ」「カブトムシ」「ノコギリクワガタ」「カナブン」「スズメバチ」が共存しているところへ人がやってくる。「スズメバチ」を見つけた途端、追い払おうとして大騒ぎになった。しかしながらスズメバチは人を見つけた途端に襲いかかってくるわけではない。皆が共存していた場を人が壊す結果となっただろうか。相手を知り、理解することは人間同士だけのことではない。あらゆる生きものの生活を知り、理解することは、共存できる環境を作っていくことになる。

イギリスの小学校では環境教育は必修科目となっている。ペットボトルのリサイクル工場を見学すれば良いというわけではなく、森に入り、違いと多様性を理解し、「環境」の意味を再認識する必要があるだろう。

自然界の中には神の仕業とでもいうべき人間の叡智では説明のできないことがある。また日本では古くから八百万の神々があり、山や河をはじめとする自然や、御神木に限ることなく樹木には神が宿ると考えられている。「環境」「生きものの生活」「多様性の重要性」など未来に託す鎮守の杜の役割は大きい。(文責 渡邊 節子)

第11回目を迎えた宗像国際環境会議

社叢学会が実行委員となっている宗像国際環境会議が10月26～28日の3日間、福岡県の宗像大社で開催された。今年は「常若 先人の叡智に学ぶ」をテーマに、八つのセッションが設けられ、①自然との関わり ②水素エネルギーの可能性 ③能登半島の現状と復興 ④海と人との関わり ⑤藍と海が紡ぐJapan Blue ⑥伝統工芸の心と技 ⑦新たな社会に向けて ⑧持続可能な仕組みに総勢41人の出演者がそれぞれの立場で意見を交した。最終日には「宗像宣言」が纏められ、宣言は後刻、環境大臣へ手渡されることとなっている。

また、ビーチクリーン、竹魚礁づくりなどの実践

活動をはじめ、次世代へ向けた映画上映、LIVE&TALK、懇親会などの出演者や参加者の交流の場も設けられ、大いに賑わった。

翌日29日には、豊かな森里川海を願う豊饒祭が宗像大社で斎行され、その後、鐘崎漁港にて園児百名がフグとタイの稚魚500匹を放流し、最後には竹魚礁が沈められ、4日に亘る宗像国際環境会議の事業を締め括った。尚、三日間のセッションはYouTubeで配信予定。





神社空間を核としたコミュニティ形成の実践

話題提供：高田知紀(兵庫県立大学 自然・環境科学研究所 准教授/
兵庫県立人と自然の博物館 主任研究員)

コーディネータ：前迫ゆり(社叢学会副理事長; 奈良佐保短期大学教授・副学長)

本講演の主な問題意識は、「神社空間を核として新たなコミュニティを形成することは可能か?」という問いである。この問いに対して本講演で示されたのは、和歌山市に鎮座する伊達神社を拠点とした地域防災コミュニティの形成プロセスである。講演は、(1)「神社空間」という視点の重要性、(2)包括的環境活動のフィールドとしての神社空間、(3)防災を軸とした新たなコミュニティの形成の3点を柱とする構成であった。

(1)「神社空間」という視点の重要性

まずわたしは、「神社空間」という空間概念の重要性を提示した。それは神域の境界は曖昧性をもち、その領域が祭事などによって拡張するからである。たとえば、祭事の場合には神輿や地車が街路空間を巡行し、また奥宮や山宮のように本殿・拝殿から遠隔の地に重要な神域が設定されている場合もある。重要なのは、神社を現代的な土地所有の考えにもとづいて閉じた空間として考えるのではなく、拡張性とネットワーク的構造をもった空間として「神社空間」の視点をもつことである。

(2)包括的環境活動のフィールドとしての神社空間

神社空間は祈りの場として、地域の人びとに一定の精神的安定性をもたらす。神社空間の維持運営のために人びとが集い、対話し、さまざまなコミュニケーションの契機を生み出してきた。さらに、神の宿る神聖な社叢は、貴重な生態系を残してきた。このように考えると、神社空間での活動は、「精神的環境の安定」「社会環境の形成」「自然環境の保全」という3つの環境に関する包括的な実践として捉えることができる。わたしは、精神・社会・自然のそれぞれの環境を切り離して考えるのではなく、神社空間での実践を通じて3つの環境を統合的に捉えた方法論を提示することが現代的な環境問題の解決にアプローチすることになると考える。

(3)防災を軸とした新たなコミュニティの形成

東日本大震災や西日本豪雨の被災地では、津波・洪水の発生時に地域住民が近くの高台に鎮座する神社に避難したケースが多くあった。このことをふまえ、南海トラフ巨大地震に伴い発生する津波についてシミュレーションを行ったところ、和歌山県では91%の神社がその被害を免れる結果となった。その背景は、神社が段丘や微高地などのうえに鎮座しているという傾向に加え、過去の災害への対応によってより安全な場所に遷座しているケースもあげられる。

神社空間の災害リスクに関するシミュレーションの結果を受けてわたしは、和歌山市の伊達神社において、神職、氏子総代、地域住民とともに、神社を地域防災の拠点として位置付けるための社会実験を展開した。この社会実験は、「防災」という地域共通の課題を通して多様な人びとが神社に集い、新たなコミュニティを

形成し、神社空間の担い手を創出していくための挑戦という意味をもつ。

伊達神社で実践したことは、まず多様な人びとと一緒に徹底的に地域を歩くということである。「徹底的に」というのは、同じ場所を繰り返し歩くことで深く地域を理解するためである。また、多様な視点を組み込むというのは、世代や立場の異なる人が集まることで複合的な視点を担保することを意味する。

次のステップは、小さな成果物を作り出すことである。神社とその周辺を歩いてみえてきた魅力や課題をもとに、有志による小さなプロジェクトを展開する。ポイントは、「プロジェクト」として、スタートとゴール、ミッションを明確にしたうえで活動を展開することである。伊達神社では、まち歩きに参加した人びとのうちおよそ10名程度でプロジェクトチームを結成し、地域の史跡・名所とハザード情報を掲載したマップづくりを進めた。そのマップを「無病息災マップ」と名付け、神社の祭事などで参拝者に配布した。

(4)講演後の質疑応答

講演後の質疑応答では、主に今後の神社空間の担い手について意見交換を行った。わたしは、地域づくりや環境保全などの現場で、ボランティア的参加、サークル的参加、ビジネス的参加の3つの関わり方から担い手を考えることの有効性を示した。また神職についても、神道や祭礼に関する知見だけでなく、地域づくりやプロジェクトマネジメントの知識・技術を身につけることが、広く神社を地域の拠点として位置付けていくうえで重要であることを共有した。



(記録：高田知紀)

(御礼) 第94回関西定例研究会は京都市右京区の松尾大社で実施されました。冒頭、神職の南禰宜様に神社の歴史について貴重なお話をいただきました。高田先生には地域と神社のつながりから興味深いご講演をいただきました。講演後、会場からも多数の質問をいただき、活発に議論されました。みなさまに厚く御礼申し上げます。(前迫ゆり)

第76回理事会を開催

第76回理事会を下記の通り、リモートと対面の併用で開催した。

日時：2024年11月26日（火）17時～18時30分

出席者：全理事22名のうち20名（委任状提出6名）

審議事項 第1号議案：令和7年度の総会について
第2号議案：今後の各種事業の進め方と役割分担について

第3号議案：外部から来ている情報、エビスコの扱いについて 報告事項 OECM推進への取り組みについて／会誌『社叢学研究』第23号並びに会報第132号の発行について／社叢インストラクター養成セミナー及び資格認定試験開催について／令和6年度上半期決算について／その他

事務局から

●令和7年度年次総会は福岡県太宰府市にある学問の神様菅原道真公を祀る太宰府天満宮にて6月21日（土）・22日（日）に開催いたします。同神社は現在本殿改修中であり、今しか見ることのできない仮殿の正式参拝、素屋根見学、宝物殿など拝観の後、特別講演、研究発表、同地域ならではのシンポジウムやパネルディスカッションを開催、見学会では竈門神社、英彦山神社を参拝するなど、今回も充実した内容を企画してします。詳細は次号以降にてお知らせしますので、奮ってご参加ください。

編集後記

皆様のご協力により、第132号をお届けすることができました。年4回の発行となり、各地の定例研究会のご報告と予告の掲載スケジュールを発行時期と調整するのは苦勞しますが、ご理解を賜れば幸甚です。

今年は今号の後に総会前の5月、総会後のご報告を兼ねた7月、そして10月に発行を予定しています。これまで年6回の発行では、4頁を原則として、総会等の折に6頁仕立てとして参りましたが、掲載すべき情報がかなりありますので、今後は年間を通じて六頁とすることも要検討です。印刷代がその分余計にかかりますので、頭の痛いところ。

わが国の生物多様性国家戦略にも文言が登場する「鎮守の森」「八百万の神」。国の進路を考える上でも社叢学会の役割もますます重要になると考えます。

（編集担当 賀来宏和）

訃報

社叢学会理事で大阪府立大学工業高等専門学校特任教授の伊藤和男先生が令和6年7月24日に、また、社叢学会創立時の理事で前京都学園大学人間文化学部教授の植木行宣先生が12月2日にご逝去されました。これまでのご貢献に感謝を申し上げますとともに、心よりご冥福をお祈り申し上げます。

次回予告【第94回関東定例研究会】

- ◆日時：2月22日（土）14時～16時
- ◆場所：國學院大學渋谷キャンパス（5号館2階5202教室）
- ◆テーマ：東日本震災一神社の復興とともに歩んだ13年（仮題）
- ◆講師：藤波祥子宮司（宮城県岩沼市八重垣神社）

次回予告【第40回中部定例研究会】

- ◆日時：3月15日（土）11時～17時
 - ◆場所：福王神社（菰野町田口240）
 - ◆テーマ：鈴鹿山麓の社叢を訪ねて
～三重県菰野町の福王神社を中心に～
 - ★日程（予定）：近鉄湯山線・薦野駅（11時）－広幡神社参拝－昼食－福王神社（13時30分～15時30分）－シデコブシ及び湿地植物群落見学－現地解散（17時菰野駅解散）
 - ◆講話（予定）：①福王神社の歴史（三橋 航宮司）
②鈴鹿山系の社叢について（長谷川 泰洋理事）
③田光のシデコブシ及び湿地植物群落について（岡村 稜理事）
④三重の山岳修験（櫻井 治男理事長）
- *詳細はホームページ上などで追って連絡します。

発行人 社叢学会事務局 〒604-8115 京都市中京区雁金町373番地みよいビル303号
TEL・FAX 075-212-2973
URL <http://www.shasou.org> E-Mail shasou@ams.odn.ne.jp